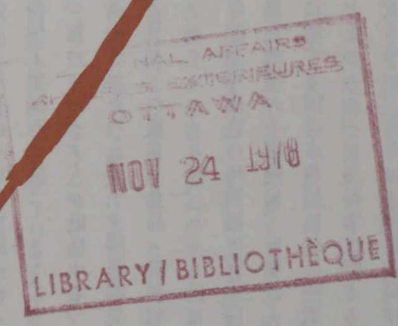


CA1  
EA947  
B71  
#20 Sep. 1978  
DOCS



1978年9月  
No.20



トピックス—— 2  
 バンクーバーの小学校—— 3  
 カナダの大学教育—— 7  
 留学生活所感—— 9  
 辺境の成人学校—— 11  
 トピックス—— 12





## ホーナー通産大臣が来日 原子力協定議定書に調印

カナダのジャック・ホーナー通産大臣(写真)が八月に来日、日加原子力協定(一九五九年)を改訂する議定書に調印したほか、日加経済関係を促進するため園田外務大臣、河本通産大臣、土光日経連会長、横田日本鋼管社長、野瀬電源開発副総裁、徳永石油公団総裁、大河原農林水産事務次官らと懇談した。

またカナダと特に関係の深い北海道を訪れ、堂垣内知事と会談したあと、農林水産省北海道農業試験場や北海道家畜改良事業団道央事務所を視察した。

八月二十二日に調印された原子力協定の議定書は、両国が核エネルギーを平和目的のためにのみ開発し、いかなる形の核拡散あるいは核爆発も防止するセーフガード(安全保障措置)を確立する決意を表明したもの。これに関する交渉はすでに今年一月にまとまっていた。

なお、ホーナー大臣には、デ・ハビランド航空会社のテイモンズ副社長、カナダ穀物審議会のデイパー事務局長、農場経営者のタケタ氏、カナダ石油公団のウォルコット副総裁、シーフード・プロダクツ社のマケツカレン副社長、BC州林産業審議会のフィッシュャー会長らが同行した。

## カナダ人の余暇利用

### 大半がテレビ、ラジオを視聴

カナダの人々はどういう風に余暇を過ごしているだろうか。最近まとまった調査によると、一九七七年三月か

ら七八年二月までの間に、成人のうち九五%がテレビを見、九〇%がラジオを聴き、八五ないし九〇%が新聞や雑誌または本を読み、およそ七五%がレコードやテープを聴いている。

何らかの運動をしている人は六〇%のほり、また全体の半数が趣味をもち、あるいは工芸品作りをしていると答えている。およそ三分の一の人々はコミュニティやボランティア活動に従事し、同じく三分の一が映画制作、写真撮影、絵画、彫刻などにくらかの時間をかけている。

過去一年間に映画を見に行った人は全体の約半数。書店を訪れた人の数も、スポーツ観戦に行った人の数も同様である。また三人に一人が博物館、公立図書館、芸術・工芸展に行ったことがあり、四人に一人が演劇、フォークやロックあるいはジャズなどの演奏会、および画廊に足を運んでいる。さらに五人に一人はクラシック音楽や舞踊の公演会に行っている。

全体的にみると、成人の五五%が、一年間に博物館、画廊、演劇場、クラシック音楽会、図書館のいずれかに行っており、カナダ人は概してかなり文化的に余暇を利用してはいるようである。

## カナダ研究講座 新講師にライト氏

筑波大学や慶応大学などで開かれているカナダ研究講座は、七月に帰任したエリック・ロス教授(マウント・アリソン大学、歴史地理専門)に代わって、九月からジェラルド・ライト氏(写真)が担当する。

ライト氏は、一九七二年以来、カナダ



の外交政策、法制改革および刑法制度、先住民、北方カナダ、カナダ連邦の現

状と将来、などの分野における研究を助成するドナー基金の副理事長。ハーバード大学で行政学の修士号(一九六五)、ジョンズ・ホプキンス大学で政治学(国際関係)の博士号(一九七六)を取得。一九六五年以来、ヨーク大学を中心に、「西洋文明における最近の傾向」、「ソ連の政府と政治」、「ソ連における芸術、政治、知識人」、「カナダの外交政策」などを講義してきた。

## 食品科学工業国際会議の議長に カナダ国際開発研究所のハルス氏

九月二十一日から京都で開かれる食品科学工業国際会議(IUFST)の議長に、初めてカナダ人が就任する。

議長に選出されたのはカナダ国際開発研究所(IRDC)の農業・食品・栄養科学部長ジョセフ・ハルス氏。ハルス氏はカナダ国際開発庁長官の特別補佐官、国立食糧・農業機構の上級職員、世界たん白質問題に関する国連事務局長付特別補佐官などをつとめ、食品科学に関する著書や論文も多い。昨年は米国食品科学研究所から国際賞を授与されている。

## 刑務所で学十号 囚人に大学教育

ブリティッシュ・コロンビア州刑務所。その廊下をずっと行くと、

二重になった鉄格子戸の向こう側にコンセットの建物がたっている。連棟式の建物の中には、七千冊の書籍を擁する図書館と、小さな教室、それにタイプやゼミ用の小部屋。

建物の入口に「ビクトリア大学」と書かれているように、ここは同大学のれっきとした一部門である。学生は総勢二十二人。ほとんどが長期の服役者だ。そのうち六人が、今年ビクトリア大学の全課程を終え、学十号を得て卒業した。二人はサスカチュワン大学から学位を取得した。いずれも、入所前は高校もでない。

ここで学ぶ囚人はきわめて熱心だという。「普通、大学では、授業を始めてから学生の反応があるまでに二、三週間かかる。ところが、ここでは、二分もたないうちに、自分たちの意見を述べる。しかも、ただ教科書に書かれているからといって、そのまま呑みにはしない」というのは、州刑務所で哲学を講じているジェームズ・アイヤーズ氏の弁だ。

BC州刑務所に大学講座が取り入れられたのは一九七一年。ここで講義を受けて出所したあとと大学教育を続ける者も多く、関係者はその成果に気をよくしている。今年の卒業生の一人フランク・ギニーなどは、学長賞を受けるほどの優秀な成績を上げた。

ところで卒業したあとどうするかという疑問が残るが、今年の卒業生の中にはいずれ大学で教えたいという者や、劇作家としてすでに好評を得ている者、護士としての資格をとりたいたい者などがいて、将来への可能性に夢をふくらませているという。

# バンクーバーの小学校

松本 典子

## カナダの教育制度

カナダの教育制度と一口に言っても、

カナダは国土が広大な関係上、カナダ政府の統轄下ではなく、州政府の管轄になっていて、カナダ全体の統一された制度というものは無い。例えば、オンタリオ州では高等学校は八年生から十三年生までであるが、ブリティッシュ・コロンビア州（以下BC州と略す）では八年生から十二年生までということからしても、その制度が各州により少しずつ異なっていることが分かる。筆者は、BC州のバンクーバーという町に居住しているので、BC州の教育制度について簡単に紹介した後、筆者の息子（小学四年）の経験を具体的に述べてみることにする。

BC州に、小学校だけが、教育制度が敷かれたのは一八七二年で、当時の総生徒数は千人足らず。その後百年の間に五十五万人に増え、大学など高度の教育を受けているのが、今、三十万人いると言われている。

BC州では、大抵の小学校がいわゆる

▲松本さん親子



幼稚園（五才）から始まり、七年生まである。八年生から十二年生までが高等学校で、十二年生を終わると、大学や専門学校へ入る資格を持つ。日本では、義務教育は「中学校まで」となっているが、BC州では、年齢で決めている。即ち、十五才までは学校へ行く義務があるが、十五才を過ぎた子供は、その子供の終了した学年とは無関係に学校をやめることができる。法律の上では、以上のようになっているが、近所の例を見ると、大抵の子供達は高等学校を卒業しているようだ。

### 教育理念

BC州の教育理念を州文部省の資料（一九七四年）から少し引用してみる。

● BC州の教育は、一人の人間としてのみだけではなく、社会の一員として成長していく機会を全ての子供に与えるために設立された。

● 人間個人として、人は知性における自己の認識と共に、精神的肉体的成長を必要とし、社会の一員として生活する能力と文化的環境への適応性を育まなければならぬ。

ればならない。

● 教育の理念は社会に貢献出来る人間を作ることでもある。民主主義の社会では、人々は互いに各々の文化遺産、伝統を分かち合い、法と他人の権利を重んじなくてはならない。

以上のような理念と、具体的な教育方針に基いて、州政府文部省でカリキュラムが組まれる。カリキュラムに従って選ばれた教材のリストも付け加えてあるので、教師は適当なものをその中から選ぶ。しかし、教師は文部省で決めたカリキュラムに忠実に従うことはない。カナダは移民の多い国。従って地域によっては、中国人が密集しているところもあればドイツ人が密集しているところもある。そのような環境の学校では、英語の時間をカリキュラムで定められた時間より多くしたりすることができる。

学校で学ぶ科目は、大体日本と同じだが、フランス語が公立の小学校でも教えられるようになったのは、この国の特色であろう。ご存じのように、フランス語もカナダの国語である関係上、政府の奨励で、カナダ全体の傾向としてフランス語を小学校のカリキュラムに入れるようになった。これに対する父兄の反響は地

	1977年	1978年
幼稚園	30名	25名
小学1年		
小学2年	34名	25名
小学3年		
小学4年		
小学5年	38名	33名
小学6年		
小学7年		

域によって違うだろうが、私の息子の通っている小学校の場合、中産階級の住宅街にあるのだが、父兄からアンケートを取ったところ、九十五パーセントがフランス語教育に賛成だったとのことである。一クラスに生徒は何人ぐらいいるのだろうか。先生と生徒の比も、小人数教育をめざして、変わってきた。一人の教師が受け持つ生徒の最大数に関して、一九七七年度と一九七八年度（今年、新しく改められた）の表（左上）があるので、参考にされたい。



## セント・ジョージ校のこと

以上、BC州の公立学校の教育であるが、バンクーバー近辺にも私立学校が、三十から四十あるようだ。その中で厳しくて、優れた男子校があるので、校長先生を訪ねてみた。この学校は四十年の歴史があり、名をセント・ジョージ・スクールと言う。教員四十五名、生徒数は、小学・高等学校を合わせて六百三十名で、リキエラムは大体BC政府文部省のに従うが、内容は公立より深く、豊富である。また、芸術、スポーツに力を入れている。知性の発達には、算数、国語の勉強ばかりに依るのではなく、絵をかくことによっても育まれるのであって、スポーツ、芸術を通して、創造力が大いに刺激されるという考え方からである。高校生のスポーツ



1ツの場合などは、週に二日の放課後の練習と土曜日に行われる試合に参加しなければならぬ。この高校を出た者は、ほとんどと大学に進むとのことである。この学校には入学試験があり、成績優秀でなければならぬのはもちろんであるが、かなり高額な学費を払わなければならない。年間の学費は次のようになっている。

二年一千五百三十ドル  
三年、四年一千八百六十ドル  
五年、六年、七年一千四十ドル  
八年、九年一千百九十ドル  
十年、十一年、十二年一千六百ドル

## 息子の学校

それでは、子供たちがどのような学校生活を送っているか、筆者の息子の経験を通じてみてみよう。

BC州では、幼稚園が小学校についている。ここでは、絵をかいたり、工作したり、歌をうったりしながら、集団生活に慣れるようにし、学校の決まりや、挨拶の仕方を少しずつ教わる。クラスは午前中または午後だけで、ほとんど勉強らしいことはしない。

さて、一年生になると、一日中、学校に行くことになり、大きくなったような印象を子供たちに与える。子供たちは早く学校に行きたがる。クラスの始まる前の何十分間か、外で遊びたいのだ。クラスが始まるまで教室に入れないので、お弁当を持って来る子供は、弁当を外に置きっぱなしにしておく。紙袋などに入れておくと、犬にさらわれてしまうこともある。ベルが鳴ると子供達はいっせいに教室

に入っていく。クラスは二年生と一年生が一緒。一年に一度とる記念写真で、みんな、口を開けて笑っている。前歯が抜けているのが一年生、大きい歯が生えているのが二年生だ。



勉強する時は、一年と二年に分かれ、しかもそれぞれ能力別に二つのグループに分かれる。学校が始まって暫くの間、親はそんな事情は知らなかった。教科書もノートも学校に置きっぱなしで、何を勉強しているのか、親は先生を訪ねて聞かなければ分からない。ある日、お昼に帰った息子が、「きょうは、午後はクラスがないって、先生が言ってたよ」と、学校に戻ろうとしない。聞き間違えかも知れないからと、学校へ行かせながらも、なせ、そんなことを言ったのか不思議に思った。たまたま先生に会って話した時、アルファベットも満足に知らない息子を、出来る方のグループに入れていたことが分かった。息子は出来る友達に追いつく学校をさぼりたくなりたい。少し無茶かと思ったが、そのまま続けさせた。一年の終わりに、みんなに迫いつき、簡単な文は書いたり読んだりできるようになった。「さすが先生は先見の明あり」と、親バカの都合の良いように納得した

ものだ。

## 掛け算は十二の段まで

二年生になった。担任の先生は変わらなかった。一学期は十一月の末で終わり、成績表をもらって、先生と個人面接がある。成績は大して良くないのに、個人面接ではほめられた。「宿題はないですか」と、日本の母親らしいことを伺うと、「朝の九時から三時まで学校で勉強しているのだから、それ以上することはしないでしよう」と言われてしまった。さすが、カナダでは、宿題や塾での勉強など考えなくていいのだ。

十二月になると、日本の学芸会のようなもので、クリスマスコンサートの練習するだけで、大したものではないが、コンサートの日には親も見にくる。スナックや飲み物を囲んで、和気あいあいとしている。これでクリスマスの休暇に入る。と言っても二週間ほどで、一月の三日頃から学校が始まる。

一月のはじめに、ご存じのように、バレンタインデーというのがあり、子供達は親愛の情を表わすために、お友達に可愛いカードを送る。カードを買いそこねた息子は、二十五個のカードを折り紙で折って済ませた。先生あてのものには立派なハートの印を書いた。意外にこんなのが変わっていて好評だったりする。三月に二学期目の成績をもらい、一週間の復活祭すなわち春休みとなる。

EXTERNAL AFFAIRS



AFFAIRES EXTÉRIEURES

TO  
À  
The Under-Secretary of State  
for External Affairs, OTTAWA (FAI)

SECURITY  
Sécurité UNCLASSIFIED

FROM  
De  
The Embassy of Canada, TOKYO

DATE  
October 16, 1978

REFERENCE  
Référence

NUMBER  
Numéro

949.

SUBJECT  
Sujet  
Bulletin Canada Issue No. 20  
- Canadian Education Special

FILE	DOSSIER
OTTAWA	
MISSION	56-13-3

ENCLOSURES  
Annexes

Issue No. 20 contained the following items:

DISTRIBUTION

Page

BY POST

- 2. - the Horner visit
- Utilization of leisure time in Canada
- Introducing Professor Gerald Wright
- IDRC's Hulse selected as Chairman of the International Union of Food Science and Technology
- 3- 6 - Vancouver's Primary Schools by Mrs. Noriko Matsumoto
- 7- 9 - Canadian University Education by Shigeru Huzinaga, Professor at the University of Alberta
- 9-11 - Foreign Students life in Canada by Mariko Dochi, York University Graduate Student and Department of External Affairs scholarship holder
- 11 - Frontier College
- 12 - Trudeau's Proposed Constitutional Revision
- Japanese Parliamentary Group visit to Canada

(with att.)

GPO

WSHDC  
MXICO  
CNBRA  
DELHI  
PARIS  
HAGUE  
CAIRO

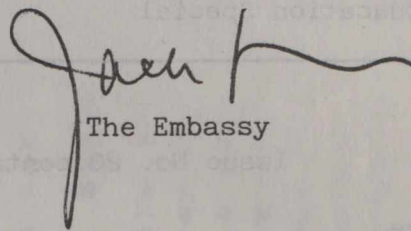
... 2

OCT 25 1978

- New Japanese Ambassador to Canada Suma
- Editorial Comment

....

2. Thirty copies of this issue are attached.

  
The Embassy

二年生になって掛け算を習いはじめた。ただし、二年生でやるのは四の段くらいまでで、完全に十二（九ではない）の段まで終わるのが四年生の頃である。日本の徹底した集中訓練を思う時、何とゆつたりと構えた教育だろうと驚く。

息子は品行方正、成績まあまあで、三年生になった。三年生になってから、フランス語の授業が始まった。教、色など簡単に、子供の興味を引くものから少しずつ指導する。初めて習ってきた文章がメアリー・ドアー（メアリーはねむる）というのである。子供が眠そうな顔をしていたから、そんな文を習ったのかも知れない。次に覚えたのがママ・ウーブラ・ラポトウ。息子の説明によると、ウーブラというのは戸を開けて家の中に入ることだという。子供の見た映画では、母親が戸を開けて家の中に入った場面だったのだろう。フランス語を知らない私は、息子の説明をうのみにした。たまたまミルクの Karton を開けようとしたら、ONZ、BAR という字が目に入った。音に出してみると、どうも息子の言うウーブラらしい。英語の指示を見ると open とある。（ポトウというのは戸のことだから、「ママ・ウーブラ・ラポトウ」は、「ママ、戸をあけて」の意味）。進んだオーディオ・ビジュアルの機械があるので、教科書を使わないで教えるのが小学校では普通らしい。利点もあるが、このように曖昧なことが起り易いので、子供にも教科書を与え、耳からだけではなく、正しい綴りと意味を同時に教えた方がいいように思う。

## フィールド・トリップ

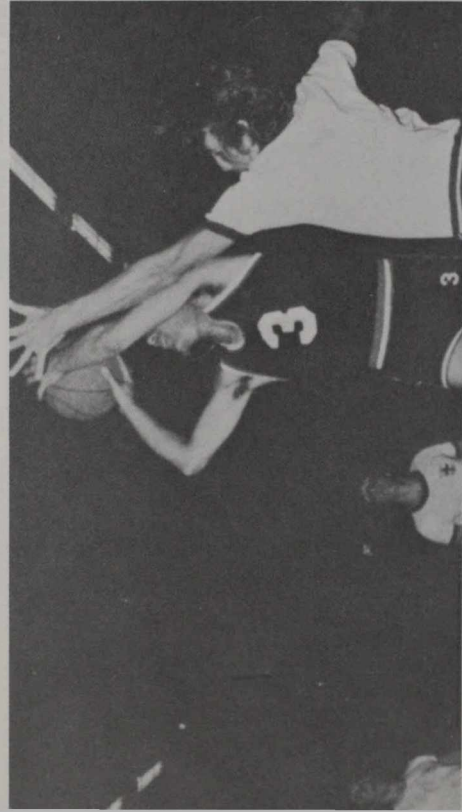
長かった暗い雨期を吹き飛ばすように、四月になると桃、梨、りんご、桜などがいっぺんに咲き乱れ、心が浮き立ってくる。そして、五月、ビクトリア女王誕生日の頃、運動会がある。これも、日本のと比較にならない程、先生も生徒も気を楽にしてやる。予行練習などしたら、スリルも面白味も減ってしまうとはかりに、ぶつつけ本番。それで結構、子供の親の歓声上がる。三年の時の運動会は一時間近く早く終わってしまった。どうしたのかと思つたら、前年の時間オーバーの失敗をくり返すまいと先生方が工夫した結果、うまく行き過ぎたとのことである。

一学期に二、三回フィールド・トリップというのがある。これはスケート、水泳の練習、動物園、博物館、美術館の見学などである。こういう時、親は車で、三、四人ずつ子供達を目的地まで送ったり、迎えに行ったりして、学校に協力する。たまに、バスで一日遠出することもあるが、費用は子供一人二十五セントくらいで済む。高学年のフィールド・トリップともなると、山に登ったり、キャンプしながら地形を調べ、昆虫や植物を観察し、クラスで習ったことと結びつけた研究目的をもって出かける。

父兄は、そのほかにも色々と学校に協力している。例えば、今度、学校に遊び場が作られたが、その費用を集めるのに、古新聞を集めたり、バザーなどを何回か催したりした。お陰で、立派なのが出来る。この遊び場に子供達の姿が見えない日はない。その外、少し遅れた子供の読み書

きの手助けやら、昼休みの体育館監督、運動会などの催し物のある時は売店の仕事、一学期に一度出る学校だよりの編集など、積極的に奉仕している。

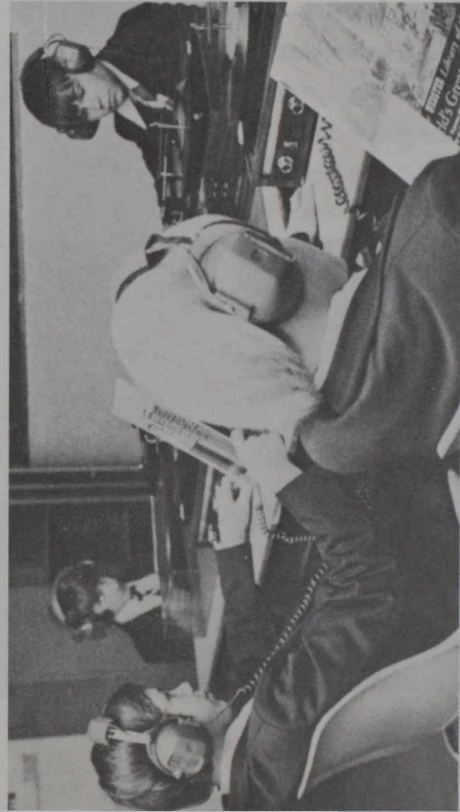
六月の末で三学期も終わり、二か月の夏休みに入る。宿題などない子供達は、体をもて余し、親の悩みの種となる。そこで、大抵キャンプに出したり、地区のコミュニティー・センターで行う会、焼物、ダンス、音楽、演劇、スポーツ等のグループに参加させたり、旅行に連れて行ったりする。子供達は九月の新学期には、元気はつらつと、新たな気分で学校に戻る。第一日を終えて帰ってくる子供達の会話は日本と同じ。「きみの担任はだれ」「きみのクラスにジョンがいるの」等、新しいクラスについて情報を交換し合う。



## 二学年編成

息子が四年になった時、ホームクラスには五年生がほとんどで、四年生は六人だけ。あまり学年に関係のない科目は五年生と一緒に勉強する。算数、国語などは分かれるらしい。しかし、社会など少し内容の程度を落としても勉強方法は五年生と同じで、二年の時と大部違う。息子は少しとまどつたようだ。

クラスに異なる学年を入れることにより、教師と生徒の比が良くなる。子供たちの人数は、学年によって多かつたり少なかつたりするが、一人の教師が担任する生徒数には限度がある。二学年編成にすれば、これが調整できる。また、自分で作業の出来る子、出来ない子、という風に生徒を分けることによって、一人の



教師が相手にする生徒の学力程度が同じくらいになり、授業準備が散漫にならないで済む。このような理由で、異なる学年を一緒にのクラスに入れるやり方が増えてきたようだ。

では、具体的にどんな風に勉強しているのだろうか。ちょっと社会科のクラスをのぞいてみよう。四年、五年はアメリカ及びカナダのインディアンについてである。子供達は先生の説明を聞いたり、映画を見たり、本物のインディアンの話を聞いたり、時には博物館にインディアン文化の実物を見に行ったりする。一通り説明が終わると、先生は四年には五年より少し易しい問題をくれる。子供達は答えを求めて、図書館の本や教室にある参考書を調べる。自分の答えが正しいか否かは、正解の書いてあるカードを見て、自分でチェックする。成績はテスト、態度、課題の処理の仕方を見て決める。天下り式に知識を与えられるのと違うし、時間をかけてするので、子供達は良く内容を理解し、覚えていく。アメリカン・インディアン以外にもっと勉強して欲しいと思うことがらは沢山あるが、この年頃では、主に勉強の仕方を学んでいるので、これでいいのだろう。

### 子供はサッカーへ、母親は運転手に

さて、交友関係はどうなっているのだろうか。日本もカナダも子供の精神、情緒の発達とは同じと見え、四年生ともなると、男の子は女の子を毛嫌いして、一緒に遊ばない。学校でフットボールをする時など大騒ぎをするらしい。息子の場合、放課後のスポーツの試合やわるふざけを



するときに、いつもくっついていて仲間が三人いる。一人は警察官の息子で、気立ての優しい、ボーリング気遣い。もう一人は、プリティッシュ・コロンビア州立大学医学部教授の息子で、やたらと大人の表現を聞いたがる、そばかすだらけのチャキチャキした子。一番仲良くしているのは建築技師の息子で、背は低いけど、活発なマメタンク。お誕生日のパーティーも結局、同じ仲間が違う場所で開催されるといふ風である。家の中でパーティーをする時、暴れてうるさいので、親はボーリング場、プール、映画などに連れて行く。そして、食事は、マクドナルドのハンバーガーが多い。

高学年になると宿題が多くなるそうだが、四年生では、遅れをとらない限り、宿題はあまりない。では、学校から帰ったあとは何をしているのだろうか。もちろん、外で遊びまわるだけの子供もいるが大抵、男の子は学校やコミュニティセンターが主催するスポーツ、例えば夏から冬にかけてはサッカー、フットボール、



春になると野球などのチームに入る。土曜日の試合のために、週二回練習がある。女の子もバレー、音楽、ガールスカウトなど何かに参加しているようだ。息子も小脇にバイオリンを抱えて、週に三回は音楽学校に行き、個人レッスンの他に、楽団に入ったりして楽しむ。音楽を習っている子供達は、精神肉体の成長のバランスを考え、ほとんどがスポーツもやっている。甚だ多忙である。父親は息子の一週間の予定をいまだかつて覚えたことがない。毎日「今日は何だ」「明日は何だ」と聞く。日曜日まで「今日は何だ」。母親は「今日は何だ」では済まされない。午後はタクシーの運転ちゃんへと早変わり、子供をプールへ、音楽学校へ、スケートリンクへ送り届ける。子供が二、三人いる親はたまったものではない。

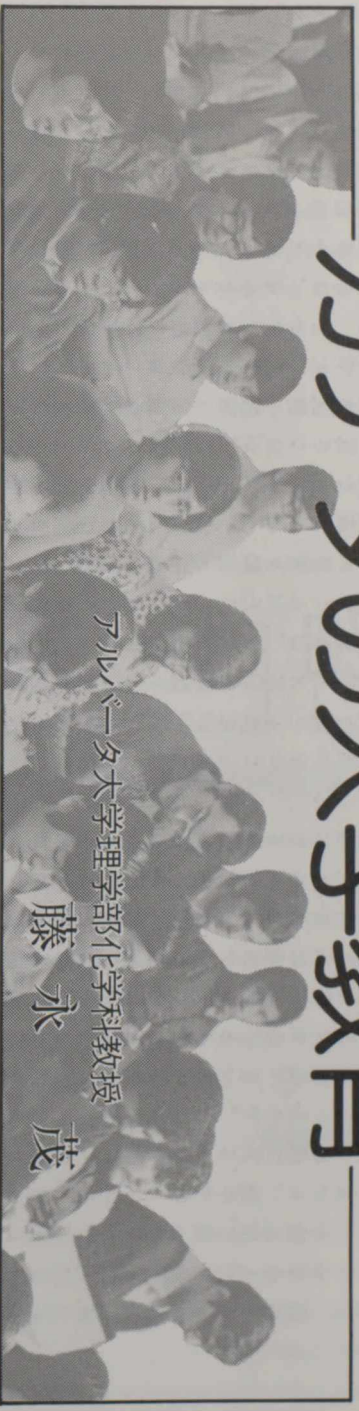
筆者の友人も二人娘がピアノを習い、息子が野球のチームで活躍している。女性にしては運転が上手だと思ったが、やはり毎日の練習のためものなのだ。母親たちが集まれば、「忙しいわね」の連発だが、決して文句をいっているの

ではない。子供たちはいずれは家庭を離れ、独立していく。今が子供と共に生活していく尊い時間なのだと認識している。この楽しみがあるからこそ、母親はタクシーの運転ちゃんを文句もいわずに兼業していられるのだろう。

以上、息子を通して見た子供たちの生活を書いてきたが、もちろん、家庭により地域により、種々様々な生活があるはずだ。しかし、カナダの学校は概して、のんびりである。悪く言えば競争心に欠け、最後の一押しというか、ガッツというものが無いような気がする。良く言えば、音楽、スポーツなど学校以外のことに精を出す余裕があるのだ。そして、全科目に秀でていなくても、ある程度の平均点を保持できれば、高校、大学にも行けるし、本人の興味のある分野や得意な方面を伸ばしていくことができる。こんな所がカナダの教育の長所ではないだろうか。(写真はいずれもセント・ジョージ・スクールの学園風景。同校提供)



# カナダの大学教育



アルバータ大学理学部化学科教授

藤永茂

## はじめに

外国生活を体験した日本人がその国の事情を正しく伝えるのは、一般に考えられていよりも困難なことだと思ふ。テレビ、新聞、書物を含めて、個人の見聞られたものだからだ。その上、異郷での経験は強烈にその人の感性の中核にひびくものであり、それに基づいて主観的な偏った判断が下され、それが一般的な事実として伝えられ勝ちである。

一九六八年の春、私は妻と二人の息子をつれてカナダに移住し、アルバータ州

エドモントン市にある州立アルバータ大学化学科の教授の職についた。二人の息子は今は同大学の学生で、長男は数学と音楽のふたまたまがけて勉強をつづけ、次男の方は生化学へ進むつもりのようにである。そこで、学生の立場、教師の立場の両方から、カナダの大学教育の一斑をとりえてみようと思ふ。私たちの直接の経験は限られたものでしかないが、アルバータ大学がカナダの大学として平均的な大学の一つであることは、十分注意してたしかめたつもりである。

## 入学試験

大学入試は日本と同じ意味では存在しない。もちろん、ある学部の入学志望者の教が収容人員を上まわる場合には、選抜が行なわれる。医学博士として身をたてようとする学生は、医学部学生として四年の本格的コースに入るまえに、少なくとも二年間は適当な講義に出席して単位を修得しなければならない。アルバー

学部学生寄宿舎(中央の平たい建物に学生食堂がある。)



タ大学では、成績は九点満点で採点されるが、この二年間の準備期間に取るコースの平均点が六点以上なければならぬことになる。しかし、これは必要下限であつて、実際にはその平均点が八点あたりでなければ医者になる望みは捨てなければならぬ。そのため、志望の学生たちは真剣に勉強する。時折、それが行き過ぎて、「自分は医学部志望だから、こんな点をつけても困る。」と、しつこく迫る学生が出てきて、手をやくこともある。しかし、医学、法学関係のぞく学部では、正常な成績で高校を卒業すれば

は、大体希望する学科に入学することができる。

## 入学してから

入学してからの二年間は、九月から十二月の第一学期、一月から四月の第二学期の八ヶ月の勉強期間と、四ヶ月の夏休みからできていく。夏の間は、何か職業について、大学生生活を送るための費用を稼ぐ学生が多い。

講義についての試験は、各学期のほとんど終りにあり、二つの学期にわたる全年コースでは、第四回目が最終試験として最も重要なものである。講義の全期間にわたつて宿題もよく出るので、良い成績をとるためには常に緊張して勉強を続けなければならない。この点、カナダの大学はアメリカの大学と同じで、イギリスの大学の場合のように、卒業まえに集約的に重要な試験はな

い。トロント大学の構成は一見イギリス風にも見えるが、實質的にはアルバータ大学と余り変わらないようである。日本では入試の難関を突破した学生は大学では勉強しなく



人びとのための大学図書館という基本的な姿勢が見事に貫かれている。

大産業国家として豊かになった日本でも、その豊かさが大学図書館の開放性などにもあらわれるようになってほしいものである。

### 学生の政治運動

「学生運動」は現在カナダの大学には存在しない。学生を過激化する社会的要因がないということであろう。大学内が平穏無事なのは、大学当局や教師たちにとって有難いことであるが、視野を日常生活の枠の外に広げれば、若者たちの心をさわがしてよい問題はいくらかあると

いうことを考えると、カナダの大学生たちの保守的な無気力さには少し淋しい気がしないでもない。

しかし、なぜ学生騒動が少ないかということには積極的な理由もある。それは、大学生がカナダの社会では日本でよりもはるかに大人として受けいれられているということである。アルバータ大学には立派な学生会館（スチューデント・ユニオン・ビルディング）があるが、その運営は全面的に学生たちの手にまかされている。また週刊の学生新聞も、費用は全部大学側がもち、しかも内容への干渉はほとんど行われていない。

カナダの大学には、旧英領のアフリカ

諸国から英連邦奨学金制度を通じて沢山の黒人学生が入学している。私の研究室の博士課程の学生の一人もウガンダからの若者だ。アフリカの政治的現状を反映して、鋭敏な政治意識の持ち主が多いようである。

### 大学と社会

カナダの総人口は約二千三百万、大学院を持っている大学の数は六〇あまり、大学生の総数は人口の約一パーセント。州立ではトロント大学、私立ではマクギル大学などなどと、名門校を挙げることでできないわけではないが、名門校に各地から学生が殺到するという現象はない。

最高学府としての大学の社会的地位は、漠然とした感じでは戦後の日本でのそれより高いかもしれないが、大学を卒業することが、そのまま高い社会的地位、高収入の一生を保証することにはならないことを、カナダ人たちは良く心得ているようだ。

特に最近の目立った傾向として、大学への入学者数は一九七〇年代の中ほどから明らかに頭打ちの様相を呈しているのにくらべて、職業学校としての性格はつきりしている各種のカレッジの入学者は年々増加の一途をたどっているようである。「大学は出たけれど……」という悩みはカナダにもはつきり存在する。

# 留 学 生 活 所 感

ヨーク大学大学院

道智 万稀子



バンクーバーからカナダに入り、トロントで生活を始めてから早や一年近く。ロッキーマウンテンと太平洋に囲まれたバンクーバーとは異なって、トロントは全くの平地にあり、のっぺりと広がった大地を思うままに区切って建設した、清潔すぎる程の近代都市である。私は昨年夏二カ月をトロント大学ですごしたあと、九

月から現在のヨーク大学へ移り、社会学部の修士課程で勉強している。カナダの大学といつても私の知っているのはこの二つの大学だけで、滞在期間も短く、そのうえ、ヨーク大学は現在学生総数が二万三千人程の大きな大学なので、私の見聞した範囲は非常に限られていることを、最初にお断りしておきたい。

### カレッジ・システム

ヨーク大学は時代の要請にそって建設されてからまだ十年ほどしかたっていない新しい大学で、トロント郊外の広々とした風景とは対照的な、近代的で新しい建物が並び立っている。夜間を含めて九つのカレッジから成るカレッジ・システ

ムをとり、学部の学生は入学したあとそのうちのひとつを選択する。それぞれのカレッジは、カレッジ新聞を発行し、各種のクラブ、集会室、ダイニングをもち、また第三世界の研究を中心とするとか、都市研究を特徴とするとかというように、カリキュラムに個性をもたせている。全寮制ではなく、各カレッジの寮に住む学生は全体の二割弱ということ。

日本の大学での学部にあたるのは、ここではArts, Science, Fine Arts, Administrative Studies, Environmental Studies, Graduate Studies, Law School, Educationにわかれるファカルティ。各カレッジの一年生は教養科目として、いくつかの個別指導クラスをとり、二年以降に専門を決める。各建物が一学部で占められるシステムと異なり、学生が専門にこだわることなくまじわりやすい雰囲気を作る

ためには、これはよいシステムといえよう。

しかし、大学院ともなると、各教授の研究室が学部ごとに統率され配置されていないために、建物をあちこち尋ねまわらなければならないこともおこる。大学組織に限らず、学生生活を支える他の多くのクラブ活動、自治会、キャンパス・サービスをとってみても、学生一人一人が直接に組織と交渉しているような感じを受けるほど、大学の行政網は複雑である。二万人以上の大学を合理的に動かすために科学的経営の知識が必要なのは言うまでもないが、この組織網のために、カレッジ・システムのコミュニティー意識養成という目的とは逆に、「ヨーク大学」の学生という意識は彼らには育ちにくいという結果をうんでいる。日本ではまず、学部よりも何大かということが聞かれるが、ここでは何を勉強しているかが問題のようだ。これはおそらく、大学組織の大きさというよりは、文化の相違や高等教育のシステムのうちがいによるのかも知れない。

### 民族的多様性

大学の組織を離れて学生のためのサービス施設をみてみると、カナダの学生生活の雰囲気がいよりのわかる。キャンパス内に銀行、郵便局、子供預り所、診療所はもちろんのこと、各種カウンセリング・デイベロップメント・センター、薬局、旅行社、食料品店、雑貨店、美容院、理髪店、ファッション・ストアなどのほか、かわったところでは、宗教センター、セックスに関するカウンセリング・センター（ホモセクシュアル組織の支部まである）があり、社会生活に必要な最低の



ものは一応そろっている。学生生活に伴う教種の国際団体、学生組織の支部も独自に活動を続けているようであるが、学生団体について語る場合、カナダ特有と思われるいくつかの民族団体のことは是非ふれておかなければならないだろう。

カナダは移民の国である。それを反映して、ヨーク大学の学生もヨーロッパ系、アジア系、アフリカ系、といった具合に、実にカナダの縮図を思わせる程にいろいろな文化的背景をもった人達が集まっている。現在この大学には、イタリア人、ユダヤ人、中国人、アラビア人、第三世界の学生組織があるが、彼らの活動は単なる集まりの域をこえ、ユダヤ教の祝日には全学休校となる程に力があるし、チャイニーズ・ウィークと称したテーマで、映画上映や物産販売、ウクライナ系の展示会、と実に活発。中国人の例をとると、数としては、フルタイム、パートタイムをあわせた全学生数のわずか五パーセントだが、組織の新聞を発行し、チャイ

ニーズ・ニュー・イヤーには寮の食堂をかりきつてパーティーを開くなど、民族的結束力を発揮している。他の大学との比較はできないが、大学講内を歩いていて、英語以外の言葉を耳にするのは日常茶飯事である。日本人、日系カナダ人もこの大学にかなりの人数にいるようだが、残念ながら日系人の民族組織はまだない。

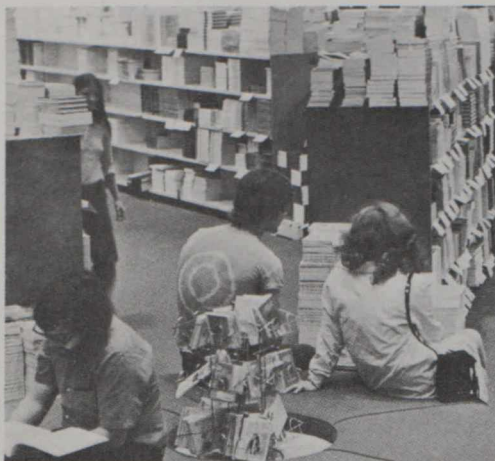
民族的多様性のもう一つの例として、私のとつているあるコースの顔ぶれを紹介してみよう。教授はチエコスロバキアからアメリカ、カナダに移ってきた方で、学生の構成は、チリ出身が一人、ハンガリー人一人、ケベック州のフレンチ・カナディアン一人、ノバ・スコシアのイングリッシュ・カナディアンが一人、そして日本からの私という具合で、英語を母国語として育ったのはたった一人の学生だけ。また友人の行っているあるクラスでは、七人のうち六人までがアメリカ、ヨーロッパからの留学生で、一人のみがカナダ人という構成である。

大学院の学生について私の知りうる限りでも、トロント出身でヨーク大学でB.A.をとり、さらに大学院もヨーク大学でという人はまず一人もいない。もちろん、英語を母国語とする人が圧倒的で、これらの例は偶然によるおもしろい組み合わせかも知れないが、やはりカナダの大学のオープン性をあらわすものとして特に目につく現象といえよう。それだけ学生の流動性があるのだろう。また教授連にしても、平均年齢が四十代という若さだし、ひとつの大学に固執することなく、講演会、セミナーと個別的な学術交換も活発だ。

こういうわけで、私としても、同じアジア系の学生と会つては何か心休まるものを覚えるし、いろいろなアクセントの強い英語を聞いては、うんざりもしながらわが英語力の貧しさも気にならなくなる。外国人の学生にとっては、心理上の利点もあるわけである。

### 大組織の中の個人主義

さて、このような雰囲気の中で、カナダの学生がどのような生活を送っているか、私の目に映るままに触れておきたい。ひとつの特徴は、民族的構成のみならず、年齢構成の点で、とりわけ大学院には、その中でも実務むきの分野、例えばLaw Schoolに、社会からもどつてきた人、あるいは働きながら勉強するというパートタイム学生の割合が多いことである。また、身体的障害をもつ学生が車イスで校内をまわっている姿もよくみかける。彼らの日々の生活は、勉強、交友、映画、買物、デートと日本の学生生活と変わりがない。



学内のカフェテリアやバブで本やノートを開いている人もいれば、授業が終わるとさっさと車で自分達の生活にもどっていく人もいる。図書館は平日、日曜は夜中の十二時（土曜は六時）まで開館している、静かに勉強したい学生には大変ありがたい。けれどもこの図書館も金曜、土曜の夜はガラガラ。彼らは週末にはやはり勉強をはなれるようだ。スポーツ施設も多くの人に開放されており、冬はスケート、水泳、スカッシュ、バスケット、冬以外はフットボール、テニス、ジョギングと、自然と環境に恵まれたカナダの学生はのびのびと楽しんでいる。

夏休みは実質四カ月以上あり、多くの学生は仕事をし、受験勉強から解放されて大学にはいると途端に気がゆるみ、自由を享受する日本の学生とはちがって、彼らはいくつかの有名なファカルティーを除いては、大学についての憧れも負いもなく、また遊びに明け暮れることもなく、勉強、娯楽、仕事といった担々と個人の生活を大切にしている感じがする。



「青春のエッセンスが詰めこまれた」大学というイメージよりも、ハイスクールから実社会へのトランジットの場として大学を見る彼らは、学資もできるだけで分て稼ぐのを当り前と考え、大学にコミットせず、自分の責任で生活設計をたてていく個人主義者といえよう。

現在の彼らの関心は、大学新聞から判断する限り、カナダ経済を反映する大学の子算削減と、就職難があげられる。カナダの失業者数はおよそ百万人ということであるが、夏期だけの学生の失業率は一五パーセントと、学資のために働かざるを得ない学生にとっては深刻。彼らは就職に関しては、大学をあまりあてにできず、各自で応募する。したがって、就職に関しては敏感にならざるを得ない。

もちろん、コンピューター・サイエンス、エンジニアリング、医科系、Law School など実務むきの学生には、この就職難もたいして縁がないようだ。学生も目先のきく者は、実社会にでて有利となる、少なくとも就職のための武器となる分野を

選ぶようである。ここにも北米社会の社会構造と人間観があらわれている気がする。

学生の評価のひとつの基準として、成績を別にして、いかに活動的であるかということがある。就職応募のための履歴書にしても、クラブ活動を始め、夏休みをいかに働いたか、どのような調査、研究を残したかなど、できるだけ多くの項目をならべられるようにすることが、ひとつの戦略的ポイントである、とある人は言っていた。授業においても、面接にしても、いかに自分をうまく、適確に表現するかは、ひとつの技術以上に、彼らの目的となつていような感じを受ける。

各人が声を大にして自己の主張をすべきこの社会で、時代の動きを読みとり、適応していく彼らのものの考え方の積極性とエネルギーには共鳴するが、一方で坦坦と人と人との間をぬっていく生き方に、何かもの足りないものを覚え、時に外にあらわれる活動性とは別に、人間理解に関する精神的幼なさ、単純さを感じるが、これは私の価値観によるものかもしれない。

小松左京氏がある本の中で、カナダのことを「白き巨大な国」と表現されていたのをふと思い出したが、若き国カナダの学生は、カナダの国柄にも似て、決してアグレッシブでなく、調和することを知っているように見うけられる。景気後退とはいえ、豊かな資源と自然を背景にしたカナダの学生は、やはり総じて大学環境に恵まれていると思う。この彼らに個人主義を超える力強さが加わった時、カナダも一段と伸びるのではないだろうか。

### 働きながら学ぶ辺境の成人学校 カナダの国内版「平和部隊」

カナダには辺境が多い。都市から遠く離れて点在する、数知れぬ小さな漁村や山村、あるいは鉱山村。さらにまた水力発電所の工事現場や鉄道員だけの小さな小さな村。それに木材の切出しキャンプ……。

そういうところで働く人たちの中には、外国から移民としてやってきたり、あるいは正規の教育を受けたことのない場合が多い。彼らにも勉強の機会を与えよう———ということ、カナダ各地で、おそらく世界でも珍らしい、働きながら学ぶ「フロンティア・カレッジ」が開かれている。

このような学校ができたのは一八九九年。当時オンタリオ州北部の木材切出し場で説教していたアルフレッド・フィッツパトリック牧師が、州政府や経営者の協力を得て、山小屋に新聞、雑誌、本を持ち込んで読書普及運動を始めたのが発端である。

運動はだんだん大きくなり、一九〇二年には若いボランティア教師が辺境に入り込んで昼間は労働者と共に働き、夜は彼らに読み書きを教えるようになった。

現在では、若い男女や夫婦、あるいは引退した人たちが、ビデオ紹介、図書貸出し、法律や健康相談、経営相談、地域の組織作り、社会開発計画など、地元と密着した活動を行っている。一九七七年九月、フロンティア・カレッジは、成人のための読み書き教育が認められて、国際的なモハメッド・レザ・パーラビ賞を授与された。

## 現状に即した憲法改正 トルドー首相が提案

カナダの基本的憲法である「英領北アメリカ条令」が定められてからすでに一一一年。連邦としてのカナダは、その間に多くの変遷を遂げ、カナダをとりまく内的、外的環境も大きく変わって、同条令はもはや現在の状況に合わなくなつたとの意見が強い。そこで、ケベック州民の不满、西部カナダの疎外感、経済問題を悪化させていくつかの要因、地域間較差などに対応し、カナダ連邦の統一と再生を図るため、連邦政府は次の諸点を骨子とする憲法改正を、議会に提案している。

### 一、前文と国家目的の表明

前文では、平等と相互信頼に基く連邦において共存し、また将来を共有する国民の意思を確認し、民族の多様性を受け入れ、先住民に敬意を表し、また英語系カナダと仏語系カナダのもつ伝統と変革を歓迎する。

カナダ連邦の目的としては、基本的人権の保護、国民の意思と合意に基づく政治、自由、安全、生活を享受する個人的権利の保障、英仏両語の同等性の保障、多様文化主義の存続、地域較差の解消およびすべての国民に対する社会正義と経済的機会の追求、などを上げている。

### 一、人権および自由憲章

これまでいろいろな法令に記されていた基本的権利や自由を、改めて憲法によって保障する。さらに、英仏語の使用に関する権利や良心と思想の自由、移動の自由といかなる州においても財産を所有

し働く自由、不当な捜査や逮捕に対する権利などが、改めて保障される。

### 一、連邦院

地域および州の利益を代表する機関として、現在の上院に代わる、連邦院を創設する。連邦院の構成は、上院より西部諸州および大西洋諸州からの代表を多くして、全体のバランスをとる。連邦院は法案を最高二ヶ月間遅延させるなどの権限をもつ。

### 一、最高裁判所

現在一片の法令によって定められているだけの最高裁に、憲法によって確固たる地位を与え、特に人権および自由を守る砦としての立場を強化する。

### 一、連邦機構の改革

カナダの元首としての女王の立場は変わらないが、カナダにおいて女王を代表する総督の権限は憲法に依拠することとする。また議会は両院と総督をもって構成され、法案は総督の名によって裁可される。総督に助言する枢密院は国務院と改称する。国務院のメンバーのうち首相およびその閣僚からなる内閣について、その職務を憲法で規定する。連邦・州首相会議について規定する。

### 一、象徴

国旗、国歌(オ・カナダ)、国王歌(ゴッド・セイブ・ザ・クイーン)女王万歳)、モットー(「海から海へ」)を憲法で認証する。

連邦政府としては、この改正案をもとに検討を重ね、カナダが名実共に独立と国家主権を確立してから五〇周年に当る一九八一年までに、新憲法を実施したい意向である。

## 国会議員団がカナダ訪問 トルドー首相らと会見

前尾繁三郎・前衆議院議長を団長とする国会議員代表団が、七月七日から一週間にわたってカナダを訪問し、トルドー首相、ラボワント上院議長、ジエローム下院議長らと会って友好を深めた。

一行のカナダ訪問は親善と政治体制の調査が主目的で、連邦議会だけでなく、州議会も訪れて、連邦制度のあり方を視察した。



写真はトルドー首相を訪問した一行。左から奈良(前)駐加大使、依田実(新自由クラブ)、トルドー首相、前尾繁三郎(自民党、日加友好議員連盟会長)、田沢吉郎(自民党)、笹山茂太郎(自民党)、宮田早苗(民社党)の各氏。

## 新駐加大使に須磨氏

一九七五年以来駐加大使をつとめた奈良靖彦氏の後任に、駐タンザニア大使、駐マレーシア大使、外務省大阪連絡事務所長を歴任した須磨末千秋氏が就任した。東京都出身。六〇才。

## 編集後記

○日本では、塾や受験制度を中心に、久しく教育問題が大きな関心を呼んでいます。そこで、カナダの教育事情はどうなっているか、カナダ在住の三人の方にそれぞれの立場から書いていただきました。

○小学校四年生(九月から五年生)の息子さんの体験をふまえてブリティッシュ・コロンビア州の学校風景や教育内容などについてまとめていただいた松本さんは、東京女子大学の出身で、インディアナ大学の比較文学科で研究されたあと、プリンストン大学などで日本語を教えました。現在は、ブリティッシュ・コロンビア大学の日本語講師をされています。

○アルバータ大学の藤永教授には、教師の立場から同大学の制度や学生について書いていただきました。藤永教授は、かつて「アメリカン・インディアン史(朝日新聞社刊)」を著し、また講談社「文化誌・世界の国」シリーズの「カナダ・アラスカ」編で詳しくカナダを紹介しておられるほどのカナダ通です。

○道智さんは筑波大学を卒業後、昨年カナダ外務省の奨学金を得てヨーク大学の大学院に入学しました。専攻は社会学です。彼女には、大学院の学生生活について報告してもらいました。

○前号に「カナダの生活の中から」と題して書いていただいた川村さんは、河村さんの間違いでした。お詫びして訂正します。(吉田)

本紙中の意見や見解は、必ずしもカナダ政府またはカナダ大使館の考え方を表わすものではないことをお断わりします。転載の際は、できるだけ出典を明らかにして下さい。なお、ご意見やご希望は左記の住所にご連絡下さい。

〒100 東京都港区赤坂七丁目三十三番

カナダ大使館広報部